

聖書：ヨシュア記3章1～6節

説教題：身をきよめなさい

1 ヨルダン川

(1) 川を渡る

出エジプト記14章には、イスラエルの民がエジプトから脱出するとき、海の実ん中のかわいた地を進んでいったことが書かれています。あのときは、後ろにエジプトの軍隊が追いついていました。後戻りはできません。目の前が海であっても前に進むしかありませんでした。

それから四十年が経ちました。今ヨシュアはヨルダン川の前に立ち、イスラエルの民を率いてカナンの地に入ろうとしています。比べてみると、モーセのときとよく似たような状況です。でも違うことがあります。後ろを見ても、イスラエルの民を追いかけて来る者はだれもいません。何も急いで渡る必要はありません。極端なことを言えば、渡りたくないと思ったら後戻りしてもよいのです。

そしてもう一つ。川の大きさです。エジプトから脱出するときにわたった海は、馬も軍隊も戦車も飲み込んでしまうほどの大きさがありました。ヨルダン川もそれに匹敵するような大きさがあるのかと想像してしまいます。ところが実際は、予想外に川幅が小さい。場所によっては数十メートルというところでしょうか。流れも緩やかです。素人目にも橋を架けてわたれる大きさに見えます。でも、ヨシュアが選んだのは橋を架けるという方法ではなく、水量が少なくなる時期を選ぶのでもなく、もっとも川幅が大きくなる時期にそのまま川を渡るという方法でした。なぜ

そうしたのか。理由を探っていきます。

(2) ラハブの信仰

その糸口は、前回見たラハブの信仰にあります。ヨシュアがヨルダン川を渡る決心をする前に、ふたりの斥候をエリコという町に派遣したときのことです。町にはラハブと呼ばれる遊女が住んでいました。ふたりの斥候は、危うくエリコ警察につかまりそうになるところをラハブに助けてもらいました。そのラハブはこう言ったのです。2章10, 11節。「あなたがたがエジプトから出て来られたとき、主があなたがたの前で、葦の海の水をからされたこと、また、あなたがたがヨルダン川の向こう側にいたエモリ人のふたりの王シホンとオグにされたこと、彼らを聖絶したことを私たちは聞いているのです。私たちは、それを聞いたとき、あなたがたのために、心がしなえて、もうだれにも、勇気がなくなってしまうました。あなたがたの神、主は、上は天、下は地において神であられるからです。」

ラハブは異邦人です。聖書を読んだことも聞いたこともなかったでしょう。しかし、彼女の耳にもイスラエルの人たちのことは聞こえていました。ラハブはイスラエルの民たちがどんどころを通ってきたのか、それを聞いて、主を信じました。そのなかでも、注目していただきたいのは、「主があなたがたの前で、葦の海の水をからされた」ということです。そのことでエリコの町の人々が恐怖を覚えていると証言しました。あとで斥候

をとしヨシュアはラハブのこのことばを聞きます。

(3) 人の計画ではなく

ヨシュアは、ヨルダン川を渡るために、いろいろなプランを考えていたでしょう。雨が降らない時期なら、適切な場所を選べばそれほど苦労なく渡れます。あるいは、橋を架けることもできます。人々の安全を考えるなら、必ずこのどちらかを選ぶはずですが、しかし、ヨシュアが選んだのは、川の水が最も多くなる時期に、まっすぐに川を渡るという方法でした。健康な大人であればなんとか渡れたかもしれませんが。しかし、赤ちゃんもいればお年寄りもいます。病人や障害者もいます。家畜財産も運ばなければならない。それなのに進むのです。ばかげた愚かな選択に見えます。もちろん、ヨシュアは信仰をもって進もうとしていますから、神が無事に川を渡らせてくださるとは信じていたでしょう。でも、なぜそこまでこだわるのでしょうか。リーダーであるならば、最も安全で確実な方法を選択するべきではないのでしょうか。

その理由の一つは、エリコにあります。ヨシュアは、ただ川を渡ることを考えていたわけではありません。その先のことも考えています。自分たちはいま神が約束してくださったカナンへの地に入ろうとしています。その足がかりとするために、エリコの町を攻め落とす必要があります。戦争になります。でもなんとか犠牲者の数が増えるようなことにはしたくない。

そこで思い出していただきたいのは、さきほどのラハブのことばです。イスラエルが葦の海を渡ったと聞いて、エリコの町の住民は震え上がっています。ここでもし、エジプト

のときと同じようにヨルダン川を渡ることができたなら、エリコはどうなるでしょう。犠牲者を出さず、戦わずして、大きな一撃を与えることとなります。ヨシュアがラハブの信仰告白を聞いたとき、ヨルダン川をまっすぐに渡っていくことが主の御心であることを確信しました。

2 契約の箱が前を進む

(1) 距離を置く意味

とは言え、本当に川を渡れるのでしょうか。確かに神は言いました。「強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。」でもこれが川を無事に渡れる保証となるのでしょうか。ヨシュアはどうしたでしょう。

3,4節。「あなたがたは、あなたがたの神、主の契約の箱を見、レビ人の祭司たちが、それをかついでいるのを見たなら、あなたがたのいるところを発って、その後ろを進まなければならない。あなたがたとはこの間には、約二千キュビトの距離をおかなければならない。それに近づいてはならない。それは、あなたがたの行くべき道を知るためである。あなたがたは、今までこの道を通ったことがないからだ。」

主の契約の箱は神の臨在を象徴しています。その箱をレビ人がかつぎ、民の先頭に立って川を渡っていきます。契約の箱と民たちの間は二千キュビト、およそ千メートルの間をおきます。どうしてこんなことをするのでしょうか。きわめて人間的な言い方をします。川を渡るとき、もし万が一川がせき止められず、何も奇跡が起らなかったなら、

どうなるか。契約の箱をかついでいるレビ人が真っ先に死にます。しかし、後ろとの間には千メートルの距離があるので、民は死なずにすみます。民を守るために、これだけの間を離しておいたのです。

「信仰さえあれば大丈夫。神が必ず守ってください」と考える方がいます。ある教会では、「どうして建物に保険をかけるのか。主の守りを信じていないのか」と質問した方がいると聞いたことがあります。確かにそのとおりです。でも、だからと言って何も準備しなくてよいという言い訳にはなりません。最大限の備えをしていくことは、信仰となにも矛盾することではないと、ヨシュアのことから教えられます。

(2) 主が先立つことの意味

だれでもそうですが、今まで経験したことのないことに直面したとき、不安を覚えます。恐れます。だめなことばかりを考えてますます落ち込みます。自分の苦しみをだれも理解してくれないと感じて、孤独になります。しかし聖書はなんと書いていますか。契約の箱が前を進むとあります。主が私たちの前を進みます。自分には初めて通る道です。しかしよく見ると、そこには主が歩いてくださった足跡があります。まさかこんなところに来るはずはないと思うところにも、すでに足跡があります。それを見て思います。「この道でよい。この道をたどっていけば必ず主に出会うことができる。」

なぜ主が先に立つのでしょうか。万が一のことが起きたとき、主が真っ先に犠牲になるためです。主はいのちをかけて、私たちの先頭に立つてくださいます。

3 身をきよめる (出エジプト記 19 章 10 節)

主の契約の箱がイスラエルの先頭に立つて進む意味はわかりました。それでは、主の契約の箱の後に続いて進むイスラエルの民たちはどのようにして備えていったのでしょうか。5 節。「あなたがたの身をきよめなさい。あす、主が、あなたがたのうちで不思議を行われるから。」

主が私たちの前に立って進んでくださいます。万が一のときは、主が犠牲とされます。私たちを救うために主は奇蹟を起こされます。それに備えてあらかじめ言われました。「あなたがたの身をきよめなさい。」具体的には、着物を洗うことだと言われます。なぜ身をきよめる必要があるのでしょうか。きよい神が来られるからです。きよい方の前ではけがれた者は死んでしまうのです。でも、着物を洗ったくらいできよくなるのでしょうか。もしそうなら、キリストはいりません。毎日洗濯をしていればよいわけですから。もちろん、着物を洗ったからきよくなることはありません。着物を洗っても、依然として私たちは罪のまま真っ黒なのです。

では、それでも「身をきよめなさい」と言われるのはなぜか。もしだれもそう言わなかったなら、気がつかないからです。言われて初めて、自分は神の前にはけがれた者であると自覚するからです。罪がなくなると言っているわけではありません。罪を深く自覚する者をこそ神は救ってくださるのだと、ヨシュアは教えました。

きよい神の前に立つとき、自分のなかにある罪と汚れを意識してしまいます。第一ヨハネ 1 章 8 節にこうあります。「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、

真理は私たちのうちにありません。」

自分こそ罪あるものであると主の前に告白するとき、私たちは真理のなかに招かれるのだと言われます。

私たちが努力してよい人間になったので、主が先頭に立ったわけではありません。反対です。自分は、愚かな者だ、けがれた者だ、失敗した者だ、挫折した者だ、人に迷惑をかけた取り返しのつかないことをしてしまった者だ、そう告白する者をこそ主はあわれみ、私たちのためにご自分のいのちを捨てようとされます。私たちの先頭に立って、進んでください。